



# 東京YMCA

2017 1/2月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司  
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

## 東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

12月に行ったボランティアリーダーのトレーニングには、約100人の学生が参加。子どもたちのスキーキャンプの引率のため、各種の研修を受けました。



We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

## 変革の年 ～ 変えてはいけないものを見つめつつ

### 新年を迎えて



公益財団法人東京YMCA  
総主事・代表理事  
廣田 光司

会員の皆様の熱い思いと神様の導きによって、新しい年を迎えられます。恵みを感じたいと思います。

昨年日本は貧困、格差、子育ての不安、いじめ等々多くの課題を抱えて過ぎました。故郷を失った原発避難者の皆さんの不安はまだ解決していません。子どもたちを中心に放射線被曝の影響も心配されます。加えて4月には熊本で新たな災害が起きました。全国のYMCAは協力して熊本YMCAの担う災害復興支援のサポートを

しました。東京からも多くの職員を送りました。MCAのたたずまいを整備することに努めます。会員の皆様と共に作成したこの中期計画を、今年さらに一歩前に進めていきたいと思えます。

東京YMCAは今年も弱くされた人々と共に生きていくことを大切にすべく、運動体でありたいと思えます。日本は今までに経験したことのない人口減少の時代を迎えています。その中で経済成長による社会の発展は難しいものとなっていきます。これからは「奪い合い」ではなく「分かち合い、支え合う」社会を作っていくことをYMCAの希望したいと思います。

2017年も会員の皆様と共に神様に喜ばれる活動を続けてまいります。今年もよろしくお願いたします。

### 灯を守る



公益財団法人東京YMCA  
評議員会会長  
勝田 正佳

1844年にロンドンで創設されたYMCAは、産業革命によって荒れた北米にも広がりました。YMCAは、精神、

知性、身体バランスのとれた全人的成長を願って、世界各地で社会奉仕に励んでいます。日本に紹介され、1880年に最初のYMCAは東京に創設されました。機関誌『六合雑誌』を発行し、日本と欧米との思想的架け橋の役割を果たし、創設以来137年の歩みのなかで、YMCAにたつた先人たちは、社会とそれなりの緊張を保って真剣に働いてきました。

東京YMCA主事だった大森兵蔵は、日本人の体格体位の向上をめざし「体育」の啓発と普及に努め、大日本体育協会(現・日本体育協会)を創設。1912年には日本のオリンピック初参加(第5回ストックホルム)を実現しました。またアメリカYMCAの主事養成機関(現スプリングフィールド大学)で考案されたバスケットボールとバレーボールの日本への紹介、普及に努めた

のでした(『日本YMCA人物事典』より)。齊藤一は、日本YMCA同盟総主事でした。戦後すぐ芦田均内閣の要請を受けて引揚援護庁長官となり、6百万人の在在外抑留者の引き上げを実現しました。退官後はYMCAに復帰し、国際基督教大学建設委員長として尽力しました。東海大学を創設した松前重義、戦後最初の普通選挙によって首相となった片山哲、「夕鶴」の劇作

者も増えた▼「たべる。はなす。あそぶ。はたらく」はグループ・ワークの基本要素。「こども食堂」はYMCAのグループのようだ。聖書が語るように、3人集まるころにはイエスが共におられ、みんなを励ましてくださる▼行政などの「公」と、個人「私」に二極化する社会で、公私を結び、人と人をつなぐ「共」の働きがYMCAにはある。その使命はどの地域にも必要である。(名誉会員 坂口順治)

### 新しい門出の年



学校法人東京YMCA学院  
理事長  
徳久 俊彦

東京YMCAに関わる皆様、明けましておめでとうございます。皆様のご健康とご活躍をお祈り

申し上げます。今年はいろいろな形で新しい歩み始める年となりました。公益財団法人東京YMCAは基盤ですが、学校法人東京YMCA学院も役員改選の年に当たり、世代交代を進める年となります。

世界に眼を向けます。昨年米英米を始めとして「内向き指向」が目立つようになっていきました。情報国を超えて飛び交い、物の売り買いも国境を越えつつあることへの「ある種の反動」かも知れません。しかしこの、国を越える動きは止めることは出来ないうつ。

また、これまでの「資本主義」「社会主義」「共産主義」と言った「パラダイム」は何れも「理念」としてはともかく、「現実」としては立ち行かなくなり、新たな枠組みが見出せない時代でもあります。「投票による民主主義」の限界も顕わになってきました。

このように時代に我々は生きており、なかなか先が見通せなくなっています。しかし「新しい門出」に当たっては、今我々が生きる時代をしっかりと見て行く「眼」を持ちたいものです。これは大変難しいことですが、私たちの先輩もそれぞれ混沌の時代にあつて、その時代の動きを見定め、社会の二一ススを汲み取り、その中で我々がやらなければならぬことを選んで来たのです。

この新しい年をそのよきな「眼」を養い、社会の要請に添えて行く、スタートの年としたいと思います。

## 赤三角

あつたかいこ飯とお汁、カレーやハンバーグ。食べる子どもも作つた大人も幸福いっぱいー▼地元有志が助け合つて2年目になる地域の「こども食堂」は今年も盛況だ。よく食べ、よくしゃべり、よく動く。気分が和らいで、仲よく血洗いもし、一緒に歌つてゲームも楽しむ。あたたかい人間関係が結ばれる▼有志は各自の持ち味を活かす。自作の米や野菜を持つ参する人、料理の腕を発揮する人、食品衛生管理のプロもいれば、ゲームの指導者もいる。豊富な経験をもつ大人たちはチームワークが良い。見学にきた先生も手伝つてくれた。参加した高齢者は、戦後に北米から届けられた「ララ物資」を思い出したと、少女時代を懐かしむ。最近では行政からの援助もあり、賛同者も増えた▼「たべる。はなす。あそぶ。はたらく」はグループ・ワークの基本要素。「こども食堂」はYMCAのグループのようだ。聖書が語るように、3人集まるころにはイエスが共におられ、みんなを励ましてくださる▼行政などの「公」と、個人「私」に二極化する社会で、公私を結び、人と人をつなぐ「共」の働きがYMCAにはある。その使命はどの地域にも必要である。(名誉会員 坂口順治)

# 東京YMCAの未来を語る

会員協議会  
ソシアスフォーラム

## 社会に向き合い、使命を果たすために

「共に語ろう東京YMCAの未来を」とをテーマに11月26日、「ソシアスフォーラム（会員協議会）」を開催。会員・スタッフ48人が山手コミュニティセンターに集まり、現在東京YMCAが取り組んでいる中期計画等を学び、語り合いました。

午前中は、菅谷淳副総主事が「2016～2018年中期計画」について1時間にわたり説明。この計画は昨夏、今後10年間の展望を見据えて策定されたもので、拠点計画や人材育成など組織全体にかかわる13項目について細かく計画されています。特に会員活動については、「YMCAは会員による運動体である」という伝統にたって会員を増やし、会員がやりがいをもって参加できる仕組みを整えていくことがうたわれています。説明後のグループディスカッションでは、「高齢者の活動ももっと強化すべきではないか」「計画内容では足りないが、着実に実行できるような工夫が必要」などの意見が出されました。

午後は、全国YMCAが取り組んでいる「ブランドディング」について、全国のタスクチームメンバーでもある星野太郎財務部主任主事が、その進捗やブランドコンセプトを紹介。YMCAブランド再生の必要性について、理解を深めました。当日の感想を2人の参加者に聞きました。ご紹介します。（広報室）



グループディスカッションする会員・スタッフ。

中期計画の概略が菅谷副総主事から報告されましたが、全般的によくまとまっている優れた計画だと考えます。特に、将来展望の中の「会員と職員が一体となって、事業と地域活動を展開する」は正にYMCAの基本活動理念です。さらに、基本方針に挙げられていることは総じてともてですが、地域に評価されて誰もが参加したくなるような、魅力ある具体的事業がやや欠けているのではと気にかかります。

東京YMCAの使命にあるように、「青少年の精

### 久保田 貞視さん

神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、「・」を常に念頭に置くことが必要ですが、一方、最近の高齢化社会と少子化を勘案すれば、幼児から高齢者まですべてを対象とした全人的教育のためのプログラムを見直し、新しく開発して実施していくことが求められます。

ブランドディングはタスクチームの星野さんから分かりやすく説明していただき、ブランドビジョン、ブランドパーソナリティに分けて、具体的に方向付けを切に期待しています。

問題として、YMCAが社会の課題を解決するために培ってきた「処方箋」、つまり社会のニーズに応えるプログラム手法を、いかに諸活動の中で活かせるか、また、中期計画にどう織り込んでいくかだと思われま

しており、このように日本全体のYMCAブランドを統一することは重要な意味を持っています。

「自分」を信じ、応援してもらえらる「人や場の存在があるからです。東京YMCAオープンスペース「iibya（リビー）」は、「その人の在りたい在りようで居られる場（let it be at the YMCA of

## 「ポジティブ」になれる場として

### 一 弥さん

午前中に学んだ中期計画は「先端的な新規事業の開発」「新たなコミュニティセンターの設置」など今後のYMCAのあり方、私たちに求められている働きが表わされており、全員が取り組んでいく必要を実感する機会となりました。

午後は、昨年度から進められているブランドディングの経緯とそのコンセプトを知る時間となりました。

グループディスカッションでは、「ブランドビジョンとして造られた「ポジティブネットワーク」という言葉について、「YMCAはポジティブ

「自分」を信じ、応援してもらえらる「人や場の存在があるからです。東京YMCAオープンスペース「iibya（リビー）」は、「その人の在りたい在りようで居られる場（let it be at the YMCA of

### 職員

### 出沼

「自分」を信じ、応援してもらえらる「人や場の存在があるからです。東京YMCAオープンスペース「iibya（リビー）」は、「その人の在りたい在りようで居られる場（let it be at the YMCA of

### 評議員

切に期待しています。

### 子育てコラム



### 子ども同士の関係と保育者の役割

「芋洗いは、芋洗いを棒を中心として芋と芋とが触れ合い、ぶつかり合ったりする中できれいになっていきます。子どもを芋にたとえるのは失礼ですが、子どもたちも、大人が必要な時にだけ介入することによって、くっつきたり離れたり、わがまま

や意地といった皮がむけ、思いやり、譲り合い、やさしさを学び、バランスのとれた成長をしていくのです。以前にキャンプでのリーダーと子どもの関わり方について聞いたお話しです。YMCAのキャンプなど活動では、子ども同士の係り合いを大切にしており、リーダーや職員は、いつも存在しながら「かきまわしすぎない」ようにしています。

と、大人に注意されて謝るよう促されても、「ごめんね」「いいよ」のやり取りでは収まらない感情があります。2～3日、口をきかないくらいに怒っても、何かのきっかけで仲直りが出来ること、そうやって仲直り

と、大人に注意されて謝るよう促されても、「ごめんね」「いいよ」のやり取りでは収まらない感情があります。2～3日、口をきかないくらいに怒っても、何かのきっかけで仲直りが出来ること、そうやって仲直り

東京YMCA保育アドバイザー  
東京家政大学元教授

新澤 誠治さん (81歳)



YMCAの人



実家の新澤製菓を継ぐ準備をしていた20歳の頃、広い世界でたくさんの人に出会ってみたいと思い、東京YMCAを訪れた。ボランティアグループ「愛隣の集い」のボスターを見つけてドアをたたき、野村貞子さん（後の大石敬三牧師夫人）など20人ほどの会員に温かく迎え入れられた。「まさに人生の扉が開いた瞬間でした」。共に讃美歌を歌い、聖書を読み、ニックネームで呼び合う。全く経験したことのない世界だった。1955年、愛隣の仲間と共に江東区の高橋（たかはし）ドヤ街と呼ばれる貧困地区の子どものキャンプに参加。その後も学習会などを開いた。

高橋は想像を絶する貧しさだった。三畳ほどの家。学校を休んで物売りや子守をさせられる子どもたち。「週1回の学習会でいいのだろうか」と迷い始めた折、高橋の「神愛保育園」で求人が出た。創立者で理事長の賀川豊彦先生に願い出て園長代理に就任。親の猛反対を押し切り、住み込みで働き始めた。

ドヤの保育園では保育料の滞りも多く、世間の2分の1ほどだった給料すら払えないこともあったが、愛隣の仲間が後援会を作るなどして支えてくれた。以後園長として40年。困っている親がいれば、定員外の0歳児や障がい児も預かった。延長保育や子育て相談なども、全国に先駆けて取り組んだ。「私は体

も弱く、行動力があつたわけでもない。ただ、苦境に生きる子どもと親と出会い、その痛みを共有して共に生きていく。その心意気だけが残った。

全国私立保育園連盟などの役員も務め、各地で講演もした。定年後は江東区の「ごども家庭支援センター」の所長となり、また東京家政大学の教授として教鞭もとった。

今も東京YMCAで保育アドバイザーを務めるのは「YMCAは心のふるさと」だから。YMCAでキリスト教に出会い、奉仕の精神を学び、人と交わり、理想を追求し、手を携えて働くことを知った。そんな人々の基礎を形づくられたという。（聞き手・文 広報室）

\*詳細はホームページをご覧ください。  
http://tokyo.ymca.or.jp/about/interview.html

# 東日本大震災復興支援 わいわいキッズin郡山 震災の影響 今もなお

## 東日本YMCAが連携「ふくしまYMCA」プロジェクト予定



福島では今も、バッタの捕まえ方を知らない子どもがいるなど、原発事故の影響が続く。放射能について親の見解が分かれ、子どもが翻弄されることも多いという。

福島県内に安心できる遊び場が欲しい。そんな声に呼んで2013年から実施している「わいわいキッズ in 郡山」が12月17日、第9回のプログラムを開催。今回もまた、郡山サベリオ学園に会場を提供いただき、約60人の親子が集まりました。第一部はクリスマス礼拝、第二部はボランティアリーダーのお楽しみ会で盛り上がりました。礼拝では飯島信牧師（日本キリスト教団東日本大震災救援対策本部担当幹事）より「最高の贈り物」と題しメッセージをいただきました。今回は東京とぐんまYMCAが協力して実施。MCAが協力して実施。6人が、子どもたちとの楽しい時間をサポートしました。

ました。会の最後にはサンタクロースが登場。企業からの協賛品やお菓子の詰まったプレゼントを一人ずつ手渡しました。毎回継続して参加する子どもたちも多く、今回は参加者の半数以上がリーダーでした。受付では「今日は○○リーダー来てる？」という子どもたちの声や「毎回楽しいにしています」との保護者の声も聞かれ、プログラムが定着してきていることを実感しました。また、震災後に続々と訪れた「施設型屋内遊び場」が、3年、5年の節目で支援団体の撤退により閉鎖されていく中、YMCAが継続する「プログラム提供型屋内遊び場」に対する期待の高さも改めて感じました。

東日本地区のYMCAは今後も連携して、福島第一原発事故に対する支援プロジェクト「ふくしまYMCA」を展開していく予定です。まだまだ困難な状況にある福島のご家族、子どもたちに対する、引き続きのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。（ディレクター/ぐんまYMCA 総理事 村上 祐介）

# 日本YMCA同盟表彰に44人 永年の貢献に感謝して



日本YMCA同盟ではYMCA運動にご奉仕くださった方々に感謝し、2年に一度表彰を行っています。10月9日に東京市（御殿場）で開催された「第19回日本YMCA大会」席上で全国の受賞者325人の表彰式が持たれましたが、遠方につき参加できなかった受賞者も多かったことから、東京YMCAでは12月14日の「3法人合同クリスマス礼拝・祝会」（説教・野田沢牧師）の中で、改めて表彰記念品をお渡しする機会を設けました。

他では得難いYMCA運動の豊かさを再確認する機会となりました。（本部事務局 戸坂昇子）

- |                   |            |           |            |           |           |           |           |           |             |
|-------------------|------------|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|
| <b>【50年継続会員賞】</b> | 石川憲彦 岩瀬康彦  | 加賀治子 栗田幸一 | 佐藤公夫 神保伊和雄 | 鈴木泰子 遠矢良男 | 東 信雄 堀井 堯 | 向井克彦 森本晴生 | 吉田明弘      |           |             |
| <b>【25年継続会員賞】</b> | 天野洋子 伊藤幾夫  | 今井武彦 小山憲彦 | 川口修一郎 木塚 清 | 佐藤洋司 澤栗加奈 | 関谷篤弘 高野 隆 | 滝沢頼子 茅野徹郎 | 柄田 毅 秀島直哉 | 堀内 一 時田敏雄 | 宮内ふみ子 吉岡紀久雄 |
| <b>【25年勤続者賞】</b>  | 安藤喜恵子 井口 真 | 浦崎暁子 加藤 学 | 草分俊一 齊藤希世  | 寒川真琴 鈴木聡子 | 高橋里香 滝波 浩 | 戸坂昇子 中里 敦 | 松本敦美      |           |             |

「子どもと一緒に本物の音楽を」と、YMCAチャイルドケアセンターが12月23日、第9回「親子のハーモニーコンサート」を開催。今年はおもてなしの音楽に惹きつけられた様子で、真剣に聴き入っていました。途中で「あわてんぼうのサンタクロース」の曲を、遠方からの参加者も多く、中には仙台からやってきた卒園児もいました。定員20人の小さな保育室ですが、32の協賛店舗、実行委員や当日の受付係りとして活躍くださった在園児・卒園児保護者みなさまの力で、今年もこの大きなコンサートが無事開催できましたことを心より感謝します。（チャイルドケアセンター 高橋里香）

「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち



「子どもと一緒に本物の音楽を」と、YMCAチャイルドケアセンターが12月23日、第9回「親子のハーモニーコンサート」を開催。今年はおもてなしの音楽に惹きつけられた様子で、真剣に聴き入っていました。途中で「あわてんぼうのサンタクロース」の曲を、遠方からの参加者も多く、中には仙台からやってきた卒園児もいました。定員20人の小さな保育室ですが、32の協賛店舗、実行委員や当日の受付係りとして活躍くださった在園児・卒園児保護者みなさまの力で、今年もこの大きなコンサートが無事開催できましたことを心より感謝します。（チャイルドケアセンター 高橋里香）

「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち

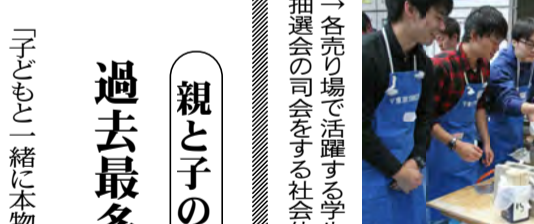
「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち



12月3日、東陽町センターを会場に「国際プログラム報告会・クリスマス会」が開催され、職員や会員、ほんご学院の学生、ボランティアリーダーなど、約40人が参加しました。第一部の礼拝では、会員の佐藤茂美さんより『博士の井戸』と題してクリスマスに因んだメッセージをいただきました。佐藤さんのお話を通じて、謙虚な心で学ぶことや、世界を別の角度から見つめ直すことの豊かさを改めて知ることができました。続いて、今年度開催された国際プログラムの分かち合いを行いました。「NYフロスバレーサマーキャンプ」「北京パトナーシップ山中湖キャンプ」「ミヤンマー・スタディーツアー（日本YMCA同盟主催）」に加え、バンクグラデュの子どものための教育を支える会「チャトショブノ」による活動報告や、ほんご学院生による留学生

活の紹介もありました。今年も、参加者同士のコミュニケーションの機会を増やすことを目的に分団での発表と会話を同時並行で行いました。発表を聴いて一人ひとりが感じたことを分団のメンバーで共有し合い、東京YMCAの国際事業の目的を、参加者全員で考えました。感じ方、受け止め方はさまざまですが、国境を越えた体験から得られた気づきや驚き、感動が共有される中で明らかになったのは、「違いは確かに存在する」ということ、そして、そのことに気づくことの意義深さでした。分団後には、恒例のラテン系バンド「ロス・コパンニエロス」の華やかな演奏やキャンプソングを楽しみながら、和やかな時間を過ごしました。（国際協力部 日野枝里子）

「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち



「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち

「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち

「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち

# 国際プログラム報告会・クリスマス会 語り合う

# 東陽町クリスマスオープンハウス 学生ボランティアが大活躍



12月23日、東陽町センター小学校先生方による「クリスマスオープンハウス（実行委員長・大沼謙一氏）を開催。今年も小学生ボランティアによる餅つき、東陽二丁目会場の焼きそば、会員やワイスマンスクラブによるおでんや海鮮焼きなど本格的な模擬店が並んだほか、深川消防署と深川消防団およびスターツCA M（株）による災害体験コーナー、近隣小学校の絵画展、江東区東陽地区少年団連合会による子ども遊び場、コスベルコンサート、バザー、抽選会など、多くの地域の方々に参加・ご協力くださり、大勢の来場者で館内中がにぎわいました。今年も、ウエルネスセンターを利用する約50人の大学生が事前準備や当日の販売を手伝ってくれたほか、社会体育・保育専門学校生が抽選会を担当するなど、学生たちが大活躍。子どもクラスの大活躍。子どもクラスの大活躍。子どもクラスの大活躍。

「あわてんぼうのサンタクロース」の曲で手遊びをする職員と出演者たち